

論文の内容の要旨

氏名： 西山 浩次

博士の専攻分野の名称： 博士(総合社会文化)

論文題名： キャリア支援者としての体験・学習経験の効用

—多様な職業・キャリアコミットメントの高まりの様相の探索的研究—

1. 本研究の目的

本論文の第1章では、キャリア支援者(本論文では、高校生へのキャリア講師〈社会人メンター〉とキャリアコンサルタントを総称する)の求められた社会的背景、環境変化の激しい社会への移行からの職業・キャリアコミットメントの重要性の高まりを踏まえて本研究の目的が示された。本研究は、高校生へのキャリア講師(社会人メンター)及びキャリアコンサルタントというキャリア支援を担う者のキャリア教育企画・実施プログラムの参加経験やキャリアコンサルタントの養成プログラム受講経験を通じてのキャリア意識、職業・キャリアコミットメントの変化をテーマとした旨を述べた。

良質なキャリア支援者を養成していくために支援者自身のキャリアや専門性へのコミットメントを高めることが必要であることから、本研究ではキャリア支援者を非専門家であるキャリア講師(社会人メンター)及び専門家として位置づけられるキャリアコンサルタントのコミットメント等のキャリア意識がどのように高められるかについて、質的方法を用いて探索的な研究を行うこと、また非専門職であるキャリア講師に関してはどのような職業・キャリアコミットメントが高まったのかについても探索的な調査を実施することが明示された。

具体的には個人の認知・意識面の分析にクラスター分析を援用して質的分析を行えるPAC分析(Personal Attitude Construct Analysis:個人別態度行動分析)を基軸に、体験者の意識変化に焦点が当たるよう、分析時に追加項目を加え、追加項目を含まないデンドログラムと追加項目を含むデンドログラムを比較することで意識変化、特に職業・キャリアコミットメントの側面での変化に焦点を当てた。また、PAC分析を通じた複数の個別事例から共通する要素や個別の違いを明らかにするためにSCAT(Step for Coding and Theorization)というステップコーディングによる質的データ分析手法も活用した。

2. 先行研究のレビュー

第2章、第3章では先行研究のレビューを行った。第2章は3節から構成され、第1節においてはキャリア支援者に関する研究を概観し、メンター・メンタリングに関する研究とカウンセラー(心理援助職)・キャリアコンサルタントの発達に関する研究が示された。

第2節は、職業・キャリアコミットメントに関する先行研究についてメタ分析も含めて欧米の概念・尺度研究を中心に整理した後、日本における職業・コミットメント研究の概要を提示した。

第3節において、これまでの組織行動研究文脈でのコミットメント研究をレビューした後組織コミットメントだけでなく他の対象のコミットメントにも共通すると提唱したコミットメントの形成・発達モデル(Bergman, Benzer, Kabins, Bhupatkar, & Panina, 2013)が示

された。

第3章では職業・キャリアコミットメントの形成・発達における質的研究の意義と本研究で採用した PAC 分析と SCAT を援用した分析についての概要・先行研究や手続きを整理して示した。

3. キャリア講師体験の PAC 分析①～③(研究①～③)

第4章から第6章ではそれぞれ、NPO 法人が提供する社会人が高校生のキャリア教育を企画し、実践するプログラムを通じて参加した社会人講師(社会人メンター)にどのような職業・キャリア意識や態度に変化が生じるのかについて探索的検証を行った。個人の意識・態度などのイメージを捉える手法である PAC 分析を活用し、本研究ではプログラム受講前後での変化を捉えるため、プログラム受講前後項目を加え出力されるクラスター分析の結果であるデンドログラムの変化を捉え、本プログラムを通じて、仕事やキャリアに対する認知的側面、意識・態度的側面での変化が得られることを行った。第4章の研究①では、調査協力者が PAC 分析の手続きで自由連想項目を記述した後に「プログラム受講前の考え」「プログラム受講後の考え」という追加項目を加えることを通じて追加項目を含まないデンドログラムを通じて、プログラムに参加することによる意識変化を捉えたのちに、追加項目を加えたデンドログラムを示すことを通じて、特にプログラムに参加することで明確になった仕事やキャリアに対する意識や行動が明確にすることができた。

第5章では、第4章と同様に2名の調査協力者の参加を得て、第4章で追加した「プログラム受講前の考え」「プログラム受講後の考え」に加えて、仕事やキャリアについてのコミットメントにつながる行動を探索するために、「仕事やキャリア開発につながる行動」という追加項目を投入して PAC 分析を行った。その結果、2名の調査協力者から中長期的なキャリアに対するコミットメント行動、現在の仕事に対するコミットメント行動が明らかにされた。

第6章では、プログラム参加による意識面・行動面の変化に加え、Bergman *et al.*(2013) が示すコミットメントの形成・発達のメカニズム、なかでも彼らが提唱する価値観の階層を探索するために「プログラム受講後の考え」、「仕事やキャリア開発につながる行動」「キャリア上ゆずれない考え」といった3項目の追加項目を加えた分析を実施した。これらの追加項目を含まないデンドログラムと追加項目を加えたデンドログラムの比較を通じたインタビューを実施し、2名の調査協力者のプログラム参加を通じての仕事やキャリアに対する意識・行動の変容及び仕事やキャリアに関する価値観を明らかにした。

4. キャリアコンサルタントの養成受講経験の PAC 分析(研究④)

第7章では、キャリア支援者として専門家となるキャリアコンサルタントの養成プログラムの受講経験から、①学習し得られたテーマ、その中でも今後の専門職としてのコミットメントを高めてアイデンティティの中核となると思われる考えと、②受講経験を通じて改めて自分にとって不足していた・不十分だったテーマを探索し、③受講経験の中で何が学習の促進要因になっているかを検討することを目的として実施された。調査には個人の意識・態度などのイメージを捉える手法である PAC 分析を活用し PAC 分析における追加項目の有効性を検討した。

具体的には調査協力者が連想項目を書き出したのちに「不足していた・不十分だった考え」「今後のコアとなる考え」という2つの追加項目を加えた分析を実施し、これらの追加項目を含まないデンドログラムと追加項目を加えたデンドログラムの比較を通じたインタビューを実施し、30代後半の企業内キャリアコンサルタント1名の調査協力者のプログラム受講を通じてのキャリアや専門家としての意識の変化・学習したテーマなどを明らかにした。

5. キャリア支援者のコミットメントの SCAT を援用した分析(研究⑤)

第8章では研究⑤として、キャリア支援者のキャリアコミットメントがどのように形成されるのかを明らかにすることを目的として、高校生へのキャリア講師を行った社会人4名とキャリアコンサルタント養成講座受講者2名の調査協力者が PAC 分析に参加した。これらのキャリア支援者に共通するコミットメント形成のメカニズムを探る目的で質的分析方法の一つである SCAT を援用して PAC 分析で得られた自由連想項目をその項目に含まれる重要度と併せて理論記述を行った。分析の結果キャリア講師のキャリアコミットメントに関しては中長期なものと現在の職務に関するコミットメントが高まったことが見いだされた。キャリアコンサルタントに関しては実務経験者と実務未経験者ではコミットメント及びそこから起因するアイデンティティの現れ方には違いが見られたものの、共通するコミットメント要素の存在が示唆された。

6. 総合考察

本論文の締めくくりとして第9章は5節から構成された。第1節では「キャリア支援すること・他者とかがわること・学習経験の意義」と題し、前半でキャリア講師を中心にその経験を通じて得られたものと促進要因を整理し、職業やキャリアに対するコミットメントのバリエーションの多様性を整理した。第1節の後半では、キャリア支援をする意義として越境的学習(石山, 2018)、キャリア確立のための実践共同体(荒木, 2007, 2009)の先行研究との対比を行い、キャリア講師体験の独自性を考察した。

第2節では Bergman *et al.*(2013)で示されるコミットメント形成・発達のメカニズムを追加項目を加えた PAC 分析の結果と研究⑤の SCAT を援用して得られた結果からコミットメント形成・発達のメカニズムの主要概念である価値観及び価値観階層、コミットメント要素とコミットメントの関係性について考察を行った。

第3節では、研究⑤の SCAT を援用した分析の結果に基づき、学びの等質性と差異性を分析すると同時に質的研究法及び方法論の PAC 分析と SCAT を援用した分析の特性について考察した。

第4節では、実践における示唆として今後の良質なキャリア支援者を輩出するために、養成機関やプログラム運営の企画者やトレーナーがどのようなガイドラインを持つべきかについて提言を行った。

最終節の5節において、本研究で得られたことと、改めて本研究の独自性を示したのちに本研究の課題を整理し、今後の方向性について検討を行った。

引用文献

- 荒木淳子 (2007). 企業で働く個人の「キャリアの確立」を促す学習環境に関する研究：実践共同体への参加に着目して 日本教育工学会論文誌, 31(1), 15-27.
- 荒木淳子 (2009). 企業で働く個人のキャリアの確立を促す実践共同体のあり方に関する質的研究 日本教育工学会論文誌, 33(2), 131-142.
- Bergman, M. E., Benzer, J. K., Kabins, A. H., Bhupatkar, A., & Panina, D. (2013). An event-based perspective on the development of commitment. *Human Resource Management Review*, 23(2), 148-160.
- 石山恒貴 (2018). 越境的学習のメカニズム：実践共同体を往還しキャリア構築するナレッジ・ブローカーの実像 福村出版.